

最優秀

障害をこえて



東京都

安藤 朱美

「行ってらっしゃいママ」夏休みの朝、子ども達は仕事にむかう私に玄関先で声をかける。「行ってきます。気をつけて遊ぶのよ」私は、外用の車椅子に乗り換えながら、下の娘にそう答えた。共働き家庭の普段の朝の風景。私は今三十九歳。中学二年、小学校六年生、三年生の三人の子どもの母親であり、四十一歳になるサラリーマンの妻であり、自らもコンピューター会社に勤める兼業主婦である。ただ一つ、普通の家庭と多少ちがいがあるとすれば、私は「身体障害者手帳一級」の車椅子使用者なのだ。

私と「障害」との歴史は長い。私が「身体障害者四級」という呼称をもらったのは、八歳の時であった。

私は、小さな田舎町の医院の長女として生まれ、それまではいたって元気で、男の子顔負けのおてんばさんであった。

そんな私に突然、生まれてはじめての試練が訪れたのである。両足を襲った激痛は、表面的には何の変調を見せないまま一昼夜続き、その痛みが自然と消えた時、私の両足には軽度の知覚まひと運動神経まひが残っていたのである。高熱にうなされたわけでもなく、事故にあったわけでもないのに、確実に私の体は一日前の私の体とはちがっていたのである。私の体の中で何が起こったのか、医師である父にさえ予測がつかなかった。

それから、親子での病院めぐりがはじまった。背骨に太い注射針を刺しての髄液検査も二、三度行なわれたが、原因は今ひとつ解からないままであった。足のまひは一月たってもいっこうに治る気配を見せなかった。「ギランバレー」という病気かもしれないという医師の判断で副腎皮質ステロイド剤の投与が数日にわたって試みられたが、それは単にムーンフェイスという顔が丸くなる副作用を残しただけで、治療効果には及ばなかったのである。東京の病院まで足を運んだが、それも徒労に終わり、結局近くのリハビリの充実した整形外科病院で、訓練による機能回復に頼る事になったのである。三カ月の間、歩く事をしていなかった私は、外側に湾曲する足を矯正するための装具を両足につけて、理学療法と併用しながらのトレーニングを開始した。

半年に及ぶ入院生活で、私はまた自分の足で歩ける様になったが、脊髄神経の一番下位の部分がやられていて、足のつけ根からつま先までの外側の部位にまひが残っているため、歩く姿は左右に揺れ動く振り

子人形の様になってしまった。

一年間の休学で、私は一歳年下の仲間と、慣れない私の新しい体を相手に、小学三年生からのスタートとしたのである。小学校での生活は、なるべくやれる事は普通の人の同じ様にやる事を目標に、学級委員、給食当番、運動会、なわとび競争と卒業までの四年間を、やり通したのである。先生や友達も、そんな私に本当に差別なく接して下さり、私は私が障害者である事を意識せずに子ども時代を送れた事に本当に感謝している。よく障害者は普通学校ではなく養護学校へという様な話を聞くが、学ぶ力があるならば、普通の人の同じ環境で生活して行く事が、本当は自然な形であると思えてならない。様々な個性を持った人間のぶつかりあいこそ、社会を形づくる土台だと思うからである。

〈 切 断 〉

外側に残ったまひと血液循環の悪い事などが重なって、右足首の外側に百円玉ぐらいの傷ができてしまった。この傷がやかいかいなのは歩くと必ずそこが「こて、こて」と地面にあたってしまうし、普通の人なら痛くて歩けないところが、痛覚のないのは便利なもので、(裏がえせば、人間にとって痛みを感じないという事は危険信号を知らせる機能の欠如なのだが…) ippこうに気にならない。学校へ遊びへと、傷などどこ吹く風で、知らず知らずに酷使してしまい、とうとう取り返しのつかない状態の傷になってしまったのである。自分の家が病院であるため自宅で治療してきていたが、夕方になると微熱が出てくる様になり、専門の外科に診察を受けたのである。

整形外科の医者というのは、人間の足の一本や二本どうとも思わないというのを何かの本で読んだ事があるが、診察するなり「切断ですね」と、こともなげに宣告されてしまったのである。少々ひん曲がってしようと、まひが残ってしようと、私を十五年間支えてきた右足がひざ下から消え去ってしまうとなると、さすがの私も一晩泣きあかさずにはいられない二回目の試練となってしまうた。

高校入試を三カ月後に控え、私は切断の手術を受けたのである。ただ、なくなった足を前にして、私は感傷にひたっている場合ではなかった。義足もまだ出来ないまま、高校の保健室での受験が待っていたのである。私の入学した高校は、県下では一番の進学校であり、おそらく今まで障害者の入学などなかった様であったし、保健室で受けた試験も、決して良く出来たとは言えなかったが、内申書のおかげで、どうか高校に進学できたのである。

高校までは、自宅から電車やバスを乗り継いで行かねばならず、結局それからの三年間は母の高校までの送り迎えが私を支えてくれた。この三年間は、医者であった父の突然の死や、その後の家計を支えるために生命保険の仕事を始めた母の事など、我が家の生活も一変するが、逆に甘えてばかりいられないという環境の変化が、さらに私を大きく成長させてくれた事は言うまでもない。高校までの十キロメートルの道を片足義足、片足はまひでありながらトライした自転車通学、母が仕事で迎えにこられない時は、松葉杖に教科書のいっばいつまったカバンを持ち、バスや電車、徒歩と二時間近くかけて帰った日々も、多感な高校時代の良きハードルであったし、その後、都会での一人暮らしを助ける経験にもつながっていったのである。

へ 青春 へ

大学は、自分の体も考え、結婚しなくても一生食べていける資格をと、薬学部を受験した。もちろん、スムーズに入学できたわけではない。面接では、体のすみからすみまでなめまわす様に見られ、母と私を目の前にして、

「本当に、そんな体で大学四年間やっていけるんですか。高校や中学とちがって、実習や実験とたいへんなんですよ。甘く考えられたら困るんだよ」

面接官の執拗なまでの言葉とまなざしを前に、私はくやし涙がとまらずその場を辞したのである。ただ、その後、母がいろいろと走りまわり、学校を説きふせてくれたおかげで、私は希望の大学での学生生活を送れる事になったのである。

確かに、食事の仕度から学校への通学、洗たくと今まですべて祖母や母まかせの生活から、まさしく一部生活資金以外は自立する一步となったのだが、一般の大学生が感じると同じ様に、すべて自分でやらねばならない事がむしろ楽しく、十八歳という若さと重なって、二本の松葉杖も一本のステッキに替え、都会の駅の長い階段を昇り降りする生活にも、すっかり順応できる様になっていった。夜遅くまでの実習や実験、人形劇のクラブ活動と、障害なんてどこ吹く風と私は自分の青春を楽しんでいた。

今の主人と知り合ったのも、こんな大学生活のまっただ中であった。右足一本なろうと、足が少々ゆがんでいようと、私は人を好きになる事に「素直」でありたかった。人を好きになる事は、どんな人間に

だって自由に与えられた感情なのだから。主人も、そんな私の何事にも怯まないありのままの姿を好きになつてくれた様だ。主人は同じ大学の水産学部で、一年時の教養課程で一緒だったのと、同じ人形劇の仲間であった。

二年時から、それぞれの学部によって校舎が離れ、私は東京、東京育ちの主人は岩手県の三陸海岸へと、離れ離れの恋人関係となつてしまった。この三年間で交わした往復書簡の数は相当数にのぼる。また、少しでも授業が休みになり、二日間の休日ができる、夜行列車にとび乗って、ステッキをつきつき三陸海岸まで片道十二時間の旅もいとわれない。顔を見て、つかの間の出会いに喜びあい、そしてまたその日の夜行で東京にトンボ帰りという日程でさえ苦にならない時代であった。今考えると、若さゆえできる一途な行動であつたのかもしれない。ただ、三年間の交際期間には、他の男性との交際もあつたし、一時は別れを考えた事もあつた。しかし今、こうして三人の子どもの父と母である事を思うと、俗に言う「赤い糸」で結ばれていたのだらうと思うのである。

自分の選んだ道でやりたい勉強をして、恋をして、たくさんの友達に恵まれた大学生活は、本当に私にとってかけがえのないたくさんの思い出と、一生の友達を得る事のできた素晴らしい四年間であつた。

〈再 発〉

大学を卒業して薬剤師として一年間勤務後私は主人と結婚をし、すぐに長男を授かった。主人の給料だけでやりくりするには、少々たいへんでもあり、仕事は、産前産後六週間の産休だけで続ける事にした。

ただ、杖をつかなければならない私の体の事や仕事を持っている事などから、主人の父と母と、同居させてもらう事になった。主人は七人兄弟の末っ子で、義父は七十歳に近い年齢であったが、孫の面倒をいろいろみて下さり、私は実の父母の様に甘えさせてもらっていた。体が不自由でも私は本当に普通の幸福にひたっていたのである。

そんな私の体に、今までとはちがう変調が現われたのは、ちょうど第二子の妊娠を知った頃であった。妊娠によるひどいつわりで、水も受けつけない毎日で、私は入院して点滴を受けなければならなかった。もちろん仕事は休み、長男は義母に頼んで見てもらった。幸いにも、つわりは一週間ほどの入院で治まり、食事も少しずつであるが食べられる様になっていった。ただ、私の心に一つだけ気にかかる症状があった。左足のひざのあたりのしびれ感である。まだ、お腹はそう大きくなっていないのだが、長時間立ったり歩いたりすると、足が上がらなくなってしまうのである。病院に診察にも行ったが、二十年前のまひの後遺症も手伝ってわかりにくい。おまけにお腹に子どもがいるとあっては、レントゲンやCTの検査も受けられず、取りあえず出産後に、もう一度来院して検査をする様に決まったのである。その年の九月、私が大卒を卒業するまで金銭的援助を下さった母方の祖父が亡くなった。その頃、私は八カ月になった大きなお腹をかかえ、日増しに動かなくなる左足に不安を覚えながら、大学卒業からずっと続けてきた薬剤師の仕事から離れる事を決めた。そして実家でお産をするために、帰省したのである。

帰省早々、弟の嫁の勤務する日赤病院の産婦人科に検診を受けにいったが、極度の貧血があり、予定日まで一カ月半以上あったが、二日後に入院する事になったのである。

入院の準備をして、母と再度訪れた病院の外来待合室で、耐えがたい激痛が、私の両足つけ根にかけて襲ったのである。

「痛い、助けて看護婦さん」

それは、なかば悲鳴に近い叫び声となって、待合室中に響きわたった。

「痛い、痛いよー」

大きなお腹をかかえた私の姿は、周囲の人から見れば、陣痛による痛みの訴えに思えたに違いない。それからの私は、その痛みと戦うのが精一杯で、自分の体で何がおこっているのかなど考える余裕もなかった。ただ、担架で外科の外来に緊急に運ばれながら、両足の感覚が全くなくなって、動かす事もできなくなった事に、もうろうとした意識の中で気がついたのである。

それからの毎日は、おなかの中の胎児をどうするのか、下半身全部まひした体は、いったい何が原因なのか、周囲の医師達の顔も戸惑いの色を隠せないのが手にとる様に感じられた。痛みがおさまり、腹部近くまで広がったまひの症状が固定した時、とりあえず、できる限り自然に近い出産ができる様、産婦人科医の手に、私の体は委ねられたのである。

陣痛促進剤の二日間の点滴投与によって、私は奇蹟的に、自然分娩による男児を出産したのである。八カ月になったばかりであったが、出生時の体重は二五〇〇グラムもあり、保育器には入ったが、健康に生まれてくれた事が、その時には大きな救いであった。

出産を終えた体は、整形外科に転送され、今度は下半身全体に及んだまひの原因追求であった。ただ、

日赤の医師には、私の体の中でおこった異変を解明する事はできなかった。

私の体は、ボロボロであった。両足の機能は全廃し、排尿も一人では行えない。多量の輸血によって、肝臓は急性肝炎を起こしていた。

整形外科から内科へ、内科からまた他の病院へと私は自分の体と戦い続けた。ただ、何故こんな事になってしまったのか、私はその原因を是が非でも知りたいと思いつけていた。

あの痛みが襲ってから半年後、ある人の紹介で訪れた労災病院で、二十年前に解明できず、またこうして私を苦しめた本当の病名が、わかったのである。

私の脊髄の中を走る血管は、生まれた時から異常であったのだ。つまり、静脈と動脈が入れ替わった『動静脈奇型』と呼ばれるものであったのだ。そこが、血液の流れの速度の異変によって動脈瘤を作った。その一部が破裂すると脊髄神経を圧迫してまひを起こしたのである。二十年前は、その破裂が小さくてすんだ事、また脊髄神経のレベルが、比較的下位であった事などで、軽度ですんでいたのである。二十年前はCTの技術も、今の様に進んでいなかったのだ。医学の進歩が、二十八歳にして、やっと私の体に巣くった病気を知る事ができたのである。その後、まだ、体の中に動脈瘤がいくつか残っているという事で、私は八時間にも及ぶ手術で、生まれもった病気の根源をようやく取り除く事ができたのである。残っていた動脈瘤が破裂していたら、命はなかったかもしれないという医師の話聞きながら、これから車椅子で生きていかなければならない自分の体と、主人と子ども達の顔が、頭の中でぐるぐるまわっていた。

私の性格は、小さい頃から負けず嫌いで、楽道家。皆は頑張り屋と言いが、決して「頑張りう！」と

思つてやっているわけではない。今、自分に与えられた状況の中で、自分のできる範囲で、やれる事は他人に任せるのではなく、残された可能性を求めてトライしていく。決して無理をしているわけでもない。それが一番自分に納得のいく形なのだから。それが人から見ると、頑張り屋として映るのだろう。そして、私はこんな性格を与えて下さった神に、とても感謝している。私が車椅子になってから、大学時代の体操の競技中に事故で脊損になって、車椅子生活になったある女性から、こんな事を言われた。

『悲しみや苦しみをとことん味わつて、沼の底からはいあがつて来る人もあれば、同じ悲しみや苦しみでもさらつと受けとめて生きていける人がいるわ。前者が私で後者があなたね』と。

後をふり返つても、過去は絶対変える事ができないのなら、いつも一歩前を見て歩いて行くだけのことなのだ。

へ再出発へ

車椅子に乗つて、私は東京にもどつてきた。次男は、入院中は乳児院に預けてあつて、もう一歳半になつていたので、ともかく早く一緒に育てたいと引きとつた。長男は、一年半の間、東京で主人の父母が保育園に預けながら育てて下さり、三歳半ですっかりお兄ちゃんらしく成長していた。

車椅子でも、母親業と主婦業がこなせる様になるためには、環境を整える事が、まず一番にしなければならなかつたことだつた。周囲の協力で、主人の実家に義父母と兄夫婦そして我が家を入れる三世帯の家を新築できることになつたのだ。福祉関係の人の力や障害者住宅を設計していらつしやる建築家の先生、

そして何より私が普通の主婦として動ける様に自分なりにいろいろなアイデアを工夫して、私は自分の働けるスペースを確保できたのである。

この家のおかげで、古い家では帰ってからも全くお客様であったのが、一転、炊事から洗濯、子育てと、人の力を借りずにこなせる様になったのである。車も手動装置付きのものに替え、行動範囲も近所から都心のデパートへと、どんどん広がっていったのだ。

そんな生活が一年半続いた頃、私は三人目の子どもを身ごもった事を知った。当然、周囲の反対はものすごく、義父母も母も主人も、三年前の二男の出産の時の事をもち出して、産まない様に毎日の様に説得にかかった。が、私は、どうしてもお腹の子どもを墮ろす事はしたくなかったし、何か予感めいたものがあり必ず女の子が生まれると信じていた。それに、私を苦しめた病の根源は、すっかり手術によって取り除かれたはずである。私は、手術をして下さった先生に連絡をとり、出産にのぞんでも大丈夫という太鼓判をもらったのである。

予想通り、本当に安産で、私は長女を出産する事ができたのである。脊損の人の出産例は、まだそんなに多くないが、下半身まひのためにあの産みの苦しみの陣痛は、一切感じないのである。

赤ちゃんの沐浴は洗面台にお湯を入れてやったり、首がすわる前は、カゴの中に寝かせてそのカゴをひざの上ののせて、買物に出かけたり、その後はいつも、車椅子の私のひざの上で、抱っこひもで結ばれた娘と私の姿が、近所では有名になってしまった。

主婦業ができ、母親業もできる様になったら、次は仕事である。"なんと欲ばりな"と思われるかもし

れないが、車椅子になる前の自分に一步でも近づくためには、また薬剤師として勤めたいと思ったのである。もちろん、主婦業も母親業も、きちんと自分でこなしていたからなのだ。

それから、私の職探しであった。私が三十三歳で、今から六年前で障害者雇用が叫ばれ始めた頃である。でも、薬剤師という資格はあっても、狭い調剤室を考えると、車椅子での勤務など考えてもらえる職場はなかった。そんな矢先、ある人の紹介で私はコンピューターのプログラムの勉強を一年間、学校に通ってできる事になったのだ。そして、卒業後、今勤務しているコンピューター関連の会社に就職できたのである。

結婚をして、子どもを持って、そして自らも仕事をする。今、私は普通の人と変わらない気持ちで毎日を生きている。そして数多くの、いろいろな人達と交流もしている。狭い世界ではなく、次に自分にできる事は何なのか、いつも問いかけている。

『自立』という言葉は、私達障害者に、何を問いかけているのだろう。決して無理を強いているのではない。他人の力を借りる事を否定しているのではない。誰もが持っている可能性をいつも前向きにのばせていけたら、どんなに素晴らしい事だろうか。様々な個性を持った人間達が、地球という大きな一つの屋根の下で、共に支え合い、学び合い、いたわり合って生きてゆく世界こそ、全ての人に『自立』を産める世界なのだ。

私は今、また自分の生き方を問い直している。私にできる事は何なのか。これからしたい仕事は何なのか。過去ではなく、一步先の未来へ、私はいつも歩いて行きたい。

安藤 朱美
昭和二十八年生まれ 会社員として三人の子
の母として奮闘中
東京
都世田谷区

選評

右足切断という事態でも高校入試に臨み、父の死に遭遇しても松葉杖で通学を続け、自立のために薬剤師を目指し、大学のクラブ活動では素直に男の子に恋をしてやがて結婚し、三人の子供を育て、動脈瘤の手術で車椅子生活を余儀なくされても「与えられた状況の中で、自分のできる範囲で、やれる事は他人に任せるのではなく、残された可能性を求めてトライしていく」という、まさに「いつも一歩前を見て歩いて行く」生き方を貫いてきた安藤さん、それでもなお「私は普通の人と変らない気持ちで毎日を生きていく」といい切る安藤さん、あなたは最高の「非凡なる凡人」です。心からの賞賛を贈ります。

(柳田邦男)